

第10話<修験の足跡>の要約と参考資料

第10話の要約

土呂久には「やんぼし様の墓」といわれる山伏（修験者）が建てた経塚があります。佐藤富喜男さん宅のお堂には、薬師三尊や十二神将がぎっしり並んでいるほか、修験との関連を示す御正体^{みしょうたい}も保存されていました。600年昔からの山岳信仰の歴史を静かに伝えています。

第10話の参考資料

10-1 やんぼし様（山伏塚）について

佐藤仲治さんの話（1976年10月31日聴取）

私とこ（「神地」）の下の道をぐりぐりん回ったところに、開拓した祖先がいかつとる。あそこの土地を踏み開いたんで、やんぼし様という。昔、祈祷師だったらしい。歯が痛いというときは、塩水をもっていくと治るということだった。白い旗をあげて祈ることもあった。「神地」の下のやんぼし様の墓は丸い。女の人らしい。

向土呂久へ渡った橋のたもとの墓は四角い。この橋の下の岩の上に水たまりがある。くみだしてもくみだしても水がたまる。このやんぼし様に参る人は、その水を入れて飲むといい、と言っていた。

佐藤鶴江さんの話（1976年11月1日、電話で聴取）

「山伏」がこっちの方言で「やんぼし」になった。山伏は、昔の坊さんで、いちばん偉かったんでしょう。土呂久には三つある。一つは「神地」の下、一つは「向土呂久」へ渡る橋の向こう、一つはうちの母の実家の「鶴」の背戸の山。土呂久は病院が遠いので、やんぼし様に参っていた。

私も虫歯が痛いので、「鶴」の裏のやんぼし様に線香たてて、焼酎を供えて参ったことがある。「向土呂久」のはカゲキヨ様がいけてある、と言っていた。カゲキヨは目の神様で、私が亜ヒ酸で目を患ったとき、いま思えば、汚い話だけど、橋の下の岩のたまり水をいただかな、と言って、木の葉の落ちているような水をくんで、目を洗ったりした。

佐藤アヤさんの話（聴取日不明）

ずい分昔、山伏が病気になって藤夫さんところで死んだ。藤夫さんの地所で、うちとの境のあたりにいけた。墓石の代りに三角の石が置いてあった。

「神地」のやんぼし様の墓の調査（1983年12月16日）

「神地」から下へくだる道の脇に立っている。「神地」を向いている。石の右側に「安永九康子」、真ん中に3文字（漢字かどうか不明）彫ってあり、上の字は悉曇^{しつたん}文字の「ア、

ア一」のようだ、左側に「十月二十」と読める。安永九年は 1780 年。

「向土呂久」のやんぼし様の墓の調査（1983 年 12 月 16 日）

「向土呂久」へ行く橋を渡った左手のこんもりした盛り土の林の中にある。「向土呂久」の家の方を向いている。

石の右側に「文政二年 施住（主の誤りだろう）」、真ん中に「奉納 三部妙典」、左側に「卯七月 力蔵」と読める。文政二年は 1819 年で巳卯。妙典は法華経をさす。

折口信夫全集第 15 巻所収「壱岐民間伝承採訪記」P474~475 より

山伏塚は、修験者が、村々に来て築いた祭壇に過ぎまい。信ぜられた山伏が、死んで葬られた墓を見るにも、あまり言い合わせた様な特別待遇である。

山伏が替れば、前修験の築いた壇によって、法を修するを快しとしなかった者もあらう。其で、幾つもの山伏塚が、一村にも現れたものであらう。

10-2 「母屋」の薬師堂について

延宝 2 年（1674）高千穂庄仏明帳

あみだ 3 間四面 みなみ村
薬師 礎居 みなみ村

（土呂久南村に、阿弥陀と薬師をまつられていた）

佐藤富喜男さんの話（1983 年 10 月 28 日聴取）

「母屋」の畑になっているところに「堂屋敷」という地名がある。畑の石垣の中に、灯籠を分解した石が混じっていたので、とりだして、今「母屋」に建てた薬師堂の横に組み立てている。ここに昔、薬師堂があったものらしい。

直径 1m20~30cm のイチョウの木があった。切ったのに倒れずに 1 週間立っていた。その木でうちの飯台をつくった。神木だったのだろう。そのうしろにお堂があったと思われる。

高千穂町教育委員会の田尻さんの話（1983 年 11 月 17 日聴取）

背の高い立像は薬師如来。脇の 2 体は脇侍^{わきじ}、ただし日光・月光ではなくて同じ形の像。時代の流れの中で、なぜか、こうなってしまったのか。12 神将。坐像の 2 体（小さい）は、民家のものがまぎれこんだのだろう。

（川原：脇侍はともに、手の形から月光菩薩のようだ。）

10-3 「母屋」の鰐口について

神道文化会編「高千穂・阿蘇」(1960年)のP441

鰐口(佐藤市蔵氏蔵)

径五寸六分、タガネ彫りの銘がある。

<表面> 奉施入東林寺薬師瑠璃光如来御宝前
日向州高千尾郷折原村居住国政敬白

<裏面> 応永十九年壬申九月念九日
願主 八郎 三郎

町指定文化財 昭和44年3月19日

(応永19年は西暦1412年。念=二十、念九日=二十九日。文字をよくみると、表と裏の年月日、願主は達者な文字。裏の八郎、三郎の名前は稚拙。本人が彫ったのだろうか?)

佐藤富喜男さんの話(1983年10月28日聴取)

折原で古い家の「先」の八郎と三郎が戦に行くとき、勝ったら十二の仏像(十二神将)をつくってあげると薬師さんに願をかけた。戦に勝って無事に戻ってきたので、約束の通り、仏像を自分で彫って奉納した。鰐口は、薬師堂にあったもの。

10-4 「母屋」の御正体^{みしょうたい}

神道文化会編「高千穂・阿蘇」(1960年)のP445

御正体(佐藤市蔵氏蔵)

径七寸一分余、木造漆箔で御正躰に光背を浮出している。光背の紋様は美しい花模様であるのも珍しい。

<表に> 本宮

<裏に> 永享八年丙辰六月一日

と漆書銘がある。

(永享八年は西暦1436年。1983年10月28日現在、この御正体の行方は不明)

広辞苑「御正体」

みしょうたい[御正体] 鏡の表面に神像・仏像・梵字などを線刻し、社寺に奉納・礼拝したもの。本来鏡は神社の神体として祀られる場合が多かったが、神仏習合によって、これに本地仏(ほんじぶつ)の姿や種子(しゅじ)を刻出するようになり、鏡像(きょうぞう)ともよばれた。中世にはさらに半肉の鑄像を銅板に取りつけた懸仏(かけぼとけ)の形式が生まれた。

10-5 「母屋」の五輪塔

佐藤富喜男さんの話（1985年2月24日聴取）

「堂の前」の畑の石垣に入っていた丸や三角の石を薬師さんの堂の横に積んどったちゃけど、灯籠やろうと思うて組み立ててみたところが、ちいと形が違ってたの。畑中に「まあい石がある」ちゅうので、それをもろてきて組んだら、大きさがちょうど合った。がけ崩れするとき、川を越えて畑中まで流れていったとやろう。郷土史を研究してる人たちが（岩戸バス停前の田尻節蔵、元税務課長の佐藤ひとし……）来てみよらしたが、これは「灯籠じゃなしに五輪塔。むかし土呂久にえらい人がおって、その墓のごとある」ち言わすとたい。

（全部で8基ある。4基は完全に復元できた。石は灰石なので、ぼろぼろに欠けてしまったものもある）

10-6 檜原の東福寺

小手川善次郎著「高千穂神楽」P28より

修験者の本院である祖母山の檜原東福寺三十六坊の遺跡もあって、これも鎌倉初期のものであろう。

日之影町編「郷土の自然と文化財」P50より

中川鱒口

嶽神社にかけられている。

敬白奉施入東福寺鱒口

応永三十二年（1425年）乙巳卯月八日

願主 永金貞裕 直清

とあり、町内の鱒口では最も古い。

（高千穂八十八社に、七折村嶽大明神 中川村とある）

延宝二年高千穂庄神明帳

古ハ御領上之村ノ奥ニ坊中御座候由申候也（檜原東福寺真相坊）